特集 Special Feature ――いかざき大凧合戦の舞台裏――

凧文化を継ぐ人たち

毎年5月5日に開かれる「いかざき大凧合戦」。今年も五十崎の空に無数の大凧が舞い、たくさんの笑顔があふれました。その起源は鎌倉時代。男子出生の初節句の祝いとして凧を揚げていたのが、風のいたずらで糸がもつれ合い、合戦が始まったと伝えられています。400年前と変わらない大空を舞台に続いてきた大凧合戦ですが、大凧を作る職人の高齢化や担い手不足といった課題に直面しています。

今回の特集では、大凧合戦を裏側で支える人たちの思いを集めました。皆さんの声を聞いて、これからのいかざき大凧合戦をどうつないでいくか、一緒に考えてみませんか。

写真：いかざき大凧合戦で凧揚げを楽しむ親子

大凧合戦を支える凧師の「技」と「思い」

自宅の作業場で背中合わせに「凧文字描き」をする忠廣さんと幸子さん。大事に使いこまれた道具が並び、けんか凧を作り続けた40年の歳月が伝わる

佐伯忠廣（ただひろ）さんは、いかざき大凧合戦用の「けんか凧」を作る凧師です。現在、町でけんか凧を手掛けるのは佐伯さんただ一人。大凧合戦や地域への思いを聞きました。

今に生きる凧文化

竹を割いて、骨組みを作り、和紙を貼る――。築100年を超える自宅の作業場で手を動かすのは、この道40年のベテラン・佐伯忠廣さん。いかざき大凧合戦で揚げられる合戦用の「けんか凧」を、81歳の今なお作り続けています。

五十崎の凧は、風が少ない盆地でも揚がるよう工夫されていて、よく揚がる凧として有名です。揚げるだけなら五十崎の凧にかなう凧はないそう。良質な和紙と竹があるから、いい凧文化が根付いたのだといわれています。

合戦用「けんか凧」を作る町内唯一の凧師

昭和の終わりごろまでは、忠廣さんのお父さんを含め、けんか凧を作る凧師が4人ほどいました。しかし現在は、忠廣さん一人だけ――。「父が高齢で一線を退いた時、跡を継ぐ決心をした。生計を立てるとか、お金のためでなく、『凧合戦を残さないけん』という思いが強かった」と忠廣さんは力を込めます。

この道40年の「匠の技」

毎年、依頼される凧の数は約200統。農業の傍ら、合間を縫って制作しています。紙貼りや文字描きは、妻の幸子（さちこ）さんがお手伝い。「家内がおってくれるけん、丁寧な凧作りができる」と感謝する忠廣さん。夫婦二人三脚が、頑張り続ける力になっています。竹を割き、凧骨を作るのは忠廣さんの役目。竹包丁で割くその厚さはわずか数ミリ。中心を厚く、両端に向かって均等に薄くなるように割く技術は、まさに匠の技。「厚すぎると重くて揚がらんし、逆に薄すぎると折れてしまう。このあんばいは、何度もやって、体で覚えるしかない」と、熟練の技を見せてくれます。

長く続けたい、でも――、

「毎年これが最後かもしれんと思いながら作りよる」と話す忠廣さん。「大凧合戦は五十崎らしさそのもの。『伝統の灯を消しちゃいかん』という強い使命感で、今まで頑張ってきた。でも私も家内もずいぶん年を取った。まだ後継者はいない――。あとどのくらいできるか分からんけれど、最後まで凧師としての誇りを持ち続けたい」と思いを語ります。五十崎の大空を舞う凧は、凧師の熟練の技と地域への思いに支えられて、今日まで続いているのです。

「伝統の灯を消しちゃいけん、
できるならずっと作り続けたい
でも、いつまで体が持つじゃろうか
凧師として、何としても守りたい――」

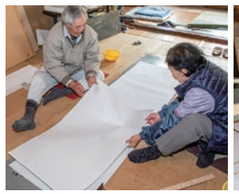
凧師　佐伯　忠廣（ただひろ）さん（81）＝古田＝

凧骨を作る忠廣さん。その数は年間約2,000本にも上る。凧が揚がるか揚らないかを左右する重要な工程で、一番神経を使う。「きちんと揚がるように作らないと凧に失礼」と、真剣な眼差しで作業をしていた

こうしてできる、いかざき大凧合戦の「けんか凧」

【①竹を割く】
山から竹を切り出し、竹包丁で割いていく。厚さは数ミリ。熟練の技が光る

【②凧骨を組む】
1統に6本の凧骨を使う。横4本、縦2本を組み合わせ、凧糸で固定する



【③和紙を貼ってつなぐ】
けんか凧の大きさは縦165センチ×横135センチ。その大きさに和紙をつなぎ合わせる

【④和紙を貼る】
凧骨にのりを塗り、つなぎ合わせた和紙をしっかりと貼っていく

【⑤凧文字描き】
天神側の「天」と五十崎側の「五」の凧文字を、枠いっぱいに描く

「凧愛」を込めて、私たちも応援

五十崎凧博物館では職員の皆さんが初節句の祝い凧を作り、内子高校美術部ではけんか凧に絵を描いています。ここでは愛着を持って凧文化を伝承し、楽しみながら大凧合戦を応援する皆さんの姿を紹介します。

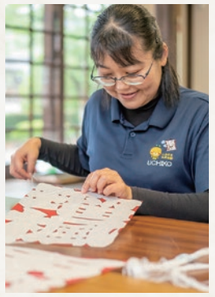
祝い凧

1_凧博物館職員の皆さん　2_繊細な作りの祝い凧　3_奥島さんから譲り受けたナイフ。竹ひごは地域の人が制作する　4,5_けんか凧の色塗りや「根付け」などの作業もしている

「揚がらん凧は、凧じゃないですらい――」受け継いだ凧への愛情

地元で凧名人と呼ばれていた奥島重利さん（故人）から受け継ぎ、初節句用の小さな祝い凧を作っています。小さいほど風を受ける面が狭くなり、揚げるのは難しいのですが、この祝い凧はちゃんと揚がるように設計されています。「揚がらん凧は凧じゃないですらい」というのが奥島さんの口癖。軽さを追求し、縦の竹ひご1本を割いて使うなど、細やかな工夫が凝らされています。赤ちゃん一人一人の名前を凧文字にしたのも奥島さんです。受け取った家族もうれしいですよね。この小さな凧には作り手の愛情がたくさん詰まっていました。私が同じように作れるか不安でしたが、凧博物館の職員として奥島さんの「凧愛」を受け継ごうと思いました。作り方は繊細で、竹ひごを貼る位置が数ミリでもずれると揚がりません。作業は大変ですが、祝い凧が家族のいい思い出になるよう、みんなで協力して制作しています。

凧博物館は五十崎の凧文化に触れられる場所です。ここからも凧の魅力を発信し、これからも五十崎の凧合戦が続いていくよう、凧作りに携わる人たちが増えるとうれしいです。



大野　智美（ともみ）さん
五十崎凧博物館職員

変わらぬ子への思い――

４月13日に共生館で開かれた「出世凧」の名前書きには、町内外から130組の家族が参加しました。凧に初節句を迎えた子どもの名前を書き、空に揚げることで健やかな成長を願います。「緊張する」と言いながら子どもの名前を書くお母さんを、お父さんが笑顔で見守っていました。

スポンサー凧

1_卒業した先輩たちと一緒に　2_細かい文字は細い筆を使って描く　3_部員と先生との距離も近く、和やかな雰囲気で制作　4_この春に入部したばかりの１年生　5_デザイン画をプロジェクターで映し、鉛筆で下描きする

「一筆一筆、心を込めて一枚一枚、丁寧に――」ワンチームで描く凧

内子高校美術部では毎年、大凧合戦のスポンサーから依頼される凧絵を制作しています。凧師さんが作る白凧に、お願いされたデザイン画を描いています。今年は約４カ月かけて32統を作りました。

絵を描くときに心掛けているのは、空に揚がったときも、真近で見てもきれいに見えること。和紙はにじみやすいので、むらができないように筆で慎重に塗っています。文字などの細かい部分まで美しく仕上げられるよう、一筆一筆心を込めて、一生懸命に描いています。同部の良さは先輩も後輩も、みんなが仲がいいところです。春休みには、卒業した先輩たちが何人も手伝いに来てくれます。部員は４人と少ないので、とても助かりました。

合戦当日は、私たちが描いた凧が風に乗って大空を舞う姿に感激。みんなで時間をかけて制作した分、空に一秒でも長く揚がってほしいと願いながら眺めました。大凧合戦は小さい頃から大好きな祭り。卒業して内子を離れたとしても、また見に来たいし、私も後輩たちの凧絵作りを手伝いたいと思います。

西田　穂香（ほのか）さん
内子高３年美術部部長

顔の表情などは特に気を付けて描く

文字の部分は型紙で写す

かわいい後輩のために駆け付けた、優しい先輩たち

空を彩る色とりどりのスポンサー凧

内子高校美術部が手掛けるこの凧は「スポンサー凧」と呼ばれ、20年前から同部で絵を描いています。地元企業や団体のロゴマークを描くことが多いそう。西田さんは「自分たちが描いた凧が競り合っているのを見ると、つい応援に熱が入る」と話していました。

凧文化を若人へ、子どもたちへ――

「楽しい思い出として、ずっと心に残ってほしい」

凧師　都築　健司さん（81）＝西沖＝

1_五十崎小学校の凧作り体験で、児童に丁寧に教える都築さん。「すごい」「やれたね」と声を掛けると、子どもたちはとびっきりの笑顔で応えてくれるそう。子どもたちの笑顔が都築さんのやりがい　2_凧骨の組み方を見て覚える中学生　3_内子高校生も凧作りに挑戦

凧師だった親父の跡を継ぎ、地域の子どもたちに凧作りを教えています。子どもたちには楽しんで覚えてほしいから、うんと褒めてあげるようにしています。

子どもの頃に感じた「楽しい、うれしい、できた」という気持ちは大人になっても忘れないものです。私の心の中には、小学生の頃、親父と凧で遊んだ思い出がずっと残っています。親父が作ってくれたのは、大きなだるまの絵が描かれたけんか凧。友達のよりも何倍も立派で、自分のために手作りしてくれたのが、うれしくてたまりませんでした。職人気質で厳しい親父でしたが、この日ばかりは一緒に糸を引っ張って、はしゃいだのを覚えています。この思い出は、私が凧師になるきっかけでもありました。

この凧作りも、子どもたちの心にいつまでも楽しい思い出として残ってほしい。大人になって子どもができたとき、凧を作ってあげたいと思ってくれたらいいですね。なんとなくでも覚えていれば応用は利きます。わが子に凧を作って、一緒に空へ揚げる。親から子へ、子から孫へと続いていけば、凧文化の伝承につながります。後継者を育てるのは簡単ではありませんが、子どもたちに凧作りの楽しさを伝えることはできる。それが継承につながると信じて、子どもたちと凧を作り続けていきたいです。

「若人との凧作りが楽しみでしょうがないんよ」

内子百畳凧愛好会会長　上田　光明さん（73）＝上町＝

1_内子百畳凧愛好会のメンバーなど約20人で制作。完成を喜ぶ皆さん　2_和気あいあいとした雰囲気　3_縦13.5㍍、横12.2㍍、重さ約150㌔の百畳凧　4_話を聞かせてくれた上田さん　5_作り方を継承できるよう、みんなで作業

「大凧を作って遊ぼうや」。約40年前、地元の凧名人・奥島重利さんに誘われ、仲間たちと大凧を制作するようになりました。昭和60年に30畳の大凧を制作して以来、50畳、70畳と大きくなり、平成9年から百畳凧の挑戦を始めました。

夢中で作り続けてきましたが、内子百畳凧愛好会の仲間たちも気付けば高齢者。7人にまで会員が減った時もあります。何度やっても揚がらない年が続き、「しんどいけんもう辞めよう」という声も――。負担が大きくなり、いつしか楽しめなくなっていたのです。そんな頃、地元の若人らが心配してくれたのか、制作を手伝ってくれるようになりました。辞めようと言っていた仲間も、若人が入ったとたんに態度が一変（笑）。うれしそうに隣で指示を飛ばしよりです。今では20人以上にまで会員が増え、パワーも効率もアップ。活気があって、みんなでする作業がすごく楽しいです。

最高にうれしかったのは若人らが「百畳凧を継ぐよ」と言ってくれたこと。今後、どうやっていってくれるのか、わくわくしています。でも大変さもあるから一緒に背負って、どこまでも手伝いたい思いです。自分たちで楽しむために始めた百畳凧ですが、多くの人たちが心待ちにしてくれるようになり、ありがたいです。来年こそは空高く揚げて会場を沸かせられるよう、また一からみんなで頑張りたいです。

＼凧作りをした中学生にインタビュー／

自分のまちの凧文化を肌で学べた

宮内　煌芽さん
（五十崎中３年）

五十崎中学校の男子生徒は大凧合戦で毎年、クラスマッチ形式の凧合戦をしています。凧は都築さんに教わりながら自分たちで手作り。凧骨の組み立てや凧糸の結び方など、難しい作業をいつも優しく手ほどきしてくれます。凧文字を描く工程が好きで、大空に揚がったときにくっきりと読めるところが面白いです。凧作りの楽しさだけでなく、五十崎の歴史にも触れられて勉強になりました。

凧のバランスを支える「根付け」を教わる

＼若人にインタビュー／

地元の人と深くつながれるのが裏方の良さ

増原圭一郎さん（42）
＝下町＝

人手不足を理由に百畳凧が無くなるのは寂しいと思い、裏方に参加するようになりました。裏方の楽しさは人と人とのつながりをものすごく感じられること。みんなで一緒に同じ作業をするから絆が深まるんです。完成した達成感、揚がったときの喜びもみんなで分かち合えていいですね。地域との関わりも増え、以前よりもっと五十崎が好きになっています。

制作では竹の切り出しなどの下準備もあり、目には見えない苦労もあると思います。そこを僕ら若者が混ざってやれば、きっと楽しさに変えられるはず。先輩たちとは何年たっても、冗談を言い合いながら一緒に百畳凧を作っていきたいです。

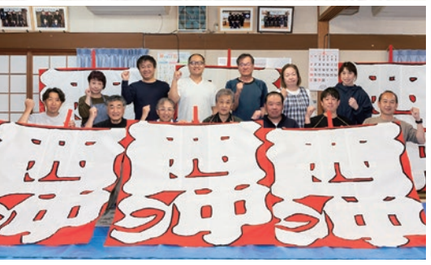
五十崎の大空に
大凧が舞う景色をいつまでも――

五十崎中3年
河野 桃矢（とうや）さん

３年生になって初めて長い時間、凧を揚げることができました。自分で作った凧を自分の手で揚げるのはすごく楽しいです。思い出の詰まった大凧合戦が、これからもずっと僕らのまちに続いてほしいです。

凧おどり保存会会長
丸山 昌明（まさあき）さん

合戦の激しい空中戦を踊りで表現しています。お客さんが喜んで見てくれるのがうれしくて、30年以上も続けよります。来年も面白おかしく踊って会場を盛り上げるけん、ぜひ皆さん見に来てください。



いかざき大凧合戦
実行委員長
宮﨑 敦（あつし）さん

五十崎の男たちを熱くする大凧合戦。白熱した戦いで、今年も大いに沸きました。地元の祭りを自分たちで楽しむのが一番。その楽しさが周りにも広がって、裏方にも参加したいという人が増えるとうれしいです。

地域おこし協力隊
大角 昂平（こうへい）さん

地元にいると当たり前に感じるかもしれませんが、400年も続く祭りがあるのはすごいこと。凧文化の魅力をもっと若者や子どもたちに伝えていきたいです。協力隊として、継承へとつながるお手伝いをしていきたいです。

写真はいかざき大凧合戦や準備を楽しむ人たちの姿を集めたものです。取材では「伝統の灯を消したくない」「凧愛を受け継ぎたい」「大凧合戦が好き」「親から子へと、ずっと続いてほしい」――。そんな思いや願いを込めて、凧文化を守り地域を盛り上げようとする人がたくさんいることが分かりました。そして、その一人一人の思いに大凧合戦は支えられています。実行委員長の宮﨑敦さんは「見るだけでなく参加したり、裏方として関わったりすると、地元への愛着も増し、大凧合戦への思い入れも深まる」と笑顔で語ります。子どもたちに凧作りを教える都築健司さんが「楽しい思い出がいつか継承につながれば」と話すように、大凧合戦での思い出が増えれば増えるほど、凧文化がふるさとに生き続けることにつながるのではないでしょうか。かけがえのない地域の伝統文化をつなぐために、あなたも何かひとつ、関わってみませんか。

【問い合わせ】
いかざき大凧合戦実行委員会事務局
☎0893（44）2118